

主 題：主は私の羊飼い

聖書箇所：詩篇23篇

テーマ：あなたは“だれに”信頼を置いて歩んでいますか？

今朝、みことばをともに見ていくに当たって、まず皆さんに質問があります。あなたは、この地上での人生にあって、一体だれに信頼を置いて歩もうとするのでしょうか？自分の満足や喜びを一体どこに追い求めようとするのでしょうか？困難や苦しみに直面する時には、一体何に平安を見出そうとするのでしょうか？これらの問い自体は何も珍しいものではありません。皆さんもこれまでに何度か考えたことのあるものだと思います。しかし、さまざまなことが起こる不安定で、先の見えない世の中にあって、だれに信頼を置くのか？そのゆるがぬ確信を持っているということは、私たちひとりひとりの歩みにとって非常に大切なことです。ですから、そのことを皆さんと一緒にいま一度考えてみたいと思います。

きょうこれから学ぶみことばは、皆さんもよくご存じであろう詩篇23篇です。ある意味、聖書の中で最も有名な箇所かもしれません。多くの人々が愛して暗唱してきた箇所の一つでしょう。心が弱まった時に、恐れや不安を覚えるような時に、この箇所によって大きな励ましを受けたことがある方は数多くおられることだと思います。私たちがそんな詩篇23篇を見てみれば、そこにほかのだれでもない、神様にゆるがぬ信頼を置いたダビデの姿を見て取ることができます。この詩篇を記したのはダビデでした。これがいつ記されたのかよくわかってはいません。ある人はダビデがまだ若かったころに記されたものだと考えていたりしますし、ある人はダビデの晩年に記されたものではないかと考えていたりもします。残念ながら詳しいことについてはよくわかりませんが、この詩篇を通じて言えることは、ダビデは自分の人生の良い時も悪い時もゆるがされることなく神様に信頼していたということです。彼はどんな状況に置かれたとしても、だれに信頼を置くべきなのかをよくわかっていました。そして彼はその確信を持って生き続けた人物でした。

### ○信頼すべき主の姿：四つの特徴

では、ダビデは一体神様のどんな姿を覚えていたのでしょうか？彼の信仰はどんなものに根差していたのでしょうか？この詩篇は大きく二つの例えが用いられています。羊飼いと羊の関係、そして食事を用意する主人とそれに招かれる客人の関係です。ダビデはその二つの例えをこの23篇の中に記していました。そしてその二つの例えを通して、信頼すべき主の姿の四つの特徴を描いていたのです。ですから、きょう私たちは、その一つ一つの特徴を順を追って見ていきたいと思います。このみことばを通して、ダビデがいつも主を信頼して歩んだように、私たちも変わらずに主を見上げる者として成長する、その励ましになることを心から願っています。

では内容に入っていく前に、まずみことばをお読みします。

### 詩篇23篇 ダビデの賛歌

「:1 【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。:2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。:3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。:4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れませぬ。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。:5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。:6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、【主】の家に住まいます。」

1. 主は“満足”を与えてくださるお方 1節

さて、信頼すべき主の姿の一つ目の特徴が1節に記されています。一つ目の特徴は、主は満足を与えてくださるお方だということです。1節は「【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。」と始まっていました。ここでまず注目してほしいのは、一番最初のことばです。この詩篇は「【主】」、言いかえれば、神様の個人的な名である“ヤハウエ”で始まっていました。出エジプト記3章の中で、エジプトの地からイスラエルの民を連れ出すようにと命じられたモーセは、燃える柴を前にして神様に尋ねていました。もし人々が私を遣わした方の名は何ですかと聞いたら、何と答えたらいいのでしょうかという問いに対して、神様が答えられたことばが、出エジプト記3：14に「わたしは、『わたしはある』という者である。」と記されてきました。この「わたしはある」という名前、これこそがモーセとイスラエルの民に対して明らかにされた神様の個人的な名でした。もちろんこれが何を意味しているのかを完全に理解することは、私たちの限られた頭では到底できません。しかし、この「わたしはある」という名前には、いろいろな意味が含まれているということを私たちは覚えることができます。例えば神様がきのうもきょうもあしたも、決して変わる事のない永遠の神様であることを表していますし、また、自分以外のほかの何にも頼ることもない、何かを必要とすることもない、自存の神様であることをも示しています。神様は私たち人間とは全く異なって、だれかの助けを必要とすることなどいっさいないのです。だれかの知恵を借りる必要もなければ、だれかの力によって支えられる必要もありません。この方は全知全能で、すべてを支配されている主権者なる神様であり、そしてほかの力にいっさい頼る必要などない、すべてみずからの力だけで存在する【主】、“ヤハウエ”でした。

そんなすばらしい、偉大な神様を覚えて、「【主】は私の羊飼い」とダビデは言うのです。ここで皆さんに感じてほしいことは、ダビデがいかにこの神様と親密な関係にあったかということです。1節をもう一度よく見てください。彼は単に主のことを指して、主は羊飼いと、主はイスラエルやすべての人の羊飼いとも言っていませんでした。彼は「【主】は私の羊飼い」と言ったのです。要するに、彼は自分と神様との関係が個人的なものであるということがよくわかっていました。他の人がどうあろうとも、自分にとって、主はいつも変わらない羊飼いであり、どんな時も偉大な力をもって自分を見守ってくださる、養ってくださるお方なのだとは彼は確信していたのです。

この詩篇を記したダビデは、自分自身が羊飼いでした。それゆえに、羊飼いがどんな存在なのかということも彼はよくわかっていました。羊飼いというのは、この当時、その仕事の厳しさなどから、あらゆる職種の中で最低のものとして扱われるものでした。だからもし家族のだれかが羊の番をしなければいけないという状況になれば、基本的には一番序列の低い末っ子とその働きを担っていました。ダビデもまさにそうでした。また、羊飼いというのは、羊に対して非常に大きな責任を負っていました。文字どおり、彼らは朝から晩まで24時間、羊とともにいなければいけなかったのです。なぜか——。それは羊がそれを必要とする存在だったからでした。羊飼いたちは食べ物や水を与えて羊の群れを養うだけではなくて、獅子や熊、また盗人といった敵から守り、また、群れからいなくなった羊がいれば、それを探し回ることもありました。良い羊飼いというのは、そのようにして羊のことを一番に考えて、彼らの世話をし、守り導き、そして時には羊のために命を落とすこともありました。それが羊飼いという存在だったのです。ダビデはそのことをほかのだれよりもよく理解していました。そして、そんな彼が神様を見上げる時に、神様を覚える時に、あなたこそが私の羊飼いなのだ、自分とともにいてくださる存在なのだとは確信していたのです。だからこそ、彼は続けて「【主】は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません」と言っていました。ダビデは主がどれほど偉大なお方なのかということもわかっていました。すべての必要を満たすことのできる、変わらない主権者なる主が自分の羊飼いとしていてくだされば、私は何か欠けて困ることなど絶対ないとダビデは信じていたのです。こうして彼は羊飼いである主に、自分の身をゆだねていました。

ここで皆さんに注目してほしいのは、ダビデは主が自分の羊飼いでであると覚えていただけでなく、自分自身の立場が羊であるということを認めていたということです。ダビデは神様がどんな存在かをよくわかっていました。同時に自分自身がどんな存在かもよくわかっていたということです。ダビデは自分自身が羊飼いの世話なしでは決して生きていくことができない、弱く不十分な存在であることを素直に認めていたということです。多くの方はよくご存じのことかと思えますけれども、この羊というのは、自分の力だけでは生きていくことのできない、弱く愚かな動物です。道を間違えて、よくさまよってしまいますし、一度ひっくり返ってしまえば自分の力では立ち上がることができないような弱い存在です。また、ほんのささいなことで恐れや不安を抱き、敵に襲われたとしても、自分の身を自分で守るすべを持っていない、臆病で無力な存在です。ダビデは、自分自身が主の前にどんな存在かということをよくわかっていました。自分自身がそんな無力な羊であることを認めていたのです。彼はプライドにあふれて、自分の力に拠り頼んで生きていくことができるという態度ではありませんでした。でも、自分には力はないけれども、どんな時も主が自分の羊飼いととしていてくだされば、何があろうとも必要な守りや助けが与えられるのだと彼は信じていたのです。だから彼は、確信を持って「【主】は私の羊飼いです」、ゆえに「私は、乏しいことはありません」と言うことができました。

これは非常に大切なポイントです。主を自分の羊飼いだとそう告白することができるのは、自分自身が主の前に羊であると認めた者だけだということです。自分自身が無力な存在であり、羊飼いの所有物であると受け入れた者だけが主を私の羊飼いだと口にすることができます。果たして私たちはどうでしょう？今、私たちはそもそも自分が何の力も知恵もない、羊飼いである主がいなければ何もすることができない、どうすることもできない羊であると認めているのでしょうか？神様を自分の個人的な羊飼いと知覚しているのでしょうか？新約聖書を見ると、イエス様ご自身が自分のことを指して羊飼いでであると描写していることを私たちはよく知っています。例えばヨハネ 10：11－15でイエス様はこのように言われていました。「：11 わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。：12 牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。：13 それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけないからです。：14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。：15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。」と。果たしてあなたは、この主イエス・キリストこそが罪から救い出してくださる救い主であり、またあなたを導く羊飼いでであると信じているのでしょうか？もし私たちが羊飼いであるイエス様の羊であるとすれば、私たちはもうすでに主のものです。そして、主のものであるとすれば、どんな状況にあろうとも、すべての必要を与えることができる、あわれみ深い羊飼いがともにいてくださるということです。この方に身をゆだねて、この方のうちに満足を見出すことができるということです。

羊飼いは羊のことを一番に考えてくれる存在でした。主が私の羊飼いであれば、この方が必ず自分を養ってくださると、私たちも確信を持つことができます。ダビデはそのようにして歩んでいました。同じように私たちも主に確信を持って歩んで行くことができます。羊飼いである主は心に満足を与えることができる偉大な神様なのだと思ふことができるのです。

## 2. 主は“休息”を与えてくださるお方 2－3節

二つ目に信頼すべき主の姿として挙げられるのは、主は休息を与えてくださるお方だということです。2－3節に「：2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。：3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。」と続いていました。

### ▶「緑の牧場に伏させ」 2 a 節

ここには羊飼いと羊の間にあるすばらしい関係性が記されていました。羊飼いである主は、羊であるダビデをまず緑の牧場に伏させられるのです。「緑の牧場に伏」させると簡潔に書いているので、このすごさが余り伝わらないかもしれません。でもここで私たちが覚えておきたいのは、そもそも羊が横になるには、幾つかの難しい条件を満たさなければいけないということです。かつて自分自身も実際に牧羊の経験を持つフィリップ・ケラーという先生は、羊が横になることがいかに困難なことなのかを自分の著書でこのように述べていました。「羊は、奇妙なことだと思われるだろうが、生まれついた性質上、次のような四つの条件を満たされない限り、横になって伏すようにさせることはほとんど不可能である。まず、彼らは臆病なため、恐怖心が完全に取り除かれることがなければ、横になろうとしない。次に、彼らは群れの中で「社会的行動」を取るため、仲間の誰とも摩擦がない状態でないと、横にならない。また、はえや寄生虫に苦しめられているなら、羊は横にならない。こういう害虫から免れている時のみ、彼らは安らぐことができる。最後に、羊は食物を求めめる必要があることを感じている限り、横にならない。飢えていない状態でなければならない。」と記されています。

皆さん、羊をペットとして飼いたくなりました？羊を養うのは非常に大変だと思いませんか？羊は非常に臆病で、恐怖に陥りやすいのです。犬やコヨーテや熊といった敵の危険が周りに少しでもあれば、彼らはいつでも逃げられるようにと立ったままでいて、休んで横になろうとはしません。また、そういった外側からの脅威だけでなく、群れの中でも、力の強い羊と弱い羊の間に摩擦が生じて、それぞれが自分の地位を主張して争いや問題が起こります。それだけでなく、羊は小さな害虫によっても悩まされることがあります。そしてそれらに加えて、彼らはお腹が空いている状態、つまり満たされていない状態であれば、横になって休もうとはしないのです。問題だらけだと思いませんか？羊が横になるのにはそれだけ大きな困難が伴うのです。でも何がすごいのかというと、主はそんないろいろな難しさを抱えた羊をも安心させて、休息を与えることができる、羊を緑の牧場に伏させることができるということです。

#### ▶「いこいの水のほとりに伴う」 2b節

それだけではありません。その続きに「いこいの水のほとりに伴われます」と書いてありました。さっと読むと、そうかと思うかもしれませんが、これも当たり前なことではありません。羊は臆病な性格のゆえに、流れの速い小川のような場所では水を飲むことはできません。水流に足を取られて流されてしまうことがあるからです。また、流れの速いところで飲むことができないだけでなく、彼らは水たまりのような汚れたところから水を飲んでしまえば、さまざまな寄生虫を内側に取り込んで病気になってしまうことがあるのです。だから羊飼いは、羊が安全できれいな水を飲むことができる場所に連れて行くだけでなく、その水辺がどこにあるのかを常に知っていることが非常に重要なことでした。羊を養うには非常に大きな難しさが伴うのです。しかし、すばらしいのは、羊飼いである主は、どこに水のほとりがあるのかをご存じであるだけでなく、羊が静まって水を飲み、休息を取ることができるようにと導くことができるのです。すごいことだと思いませんか？そんな困難さえも主の前には何もないのです。でも何よりもすばらしいのは、羊飼いである主は、私たちに対しても同じように休息を与えてくださるということです。

今、私たちは羊の姿を考えました。私たちは彼らの姿を見て、問題だらけの存在だ、愚かな弱い存在だと考えたと思います。でもよく考えてみてください。私たちも羊のように、弱い存在ではないでしょうか？聖書が私たちのことを羊として描いているというのには、そこに明白な理由があります。なぜなら私たちも羊と同じように弱く愚かな存在だからです。私たちの歩みを少し振り返ってみてください。私たちの周りにも数多くの問題や困難が存在しています。私たちの心を悲しませることがあれば、私たちを疲れさせるようなものもたくさんあります。恐れや不安を覚えさせるような問題に直面することも多々あります。周りのいろいろなものによって、プレッシャーを覚えて苦しめられるようなことがあ

ば、自分の手に負えないようなことが起こって、その結果、心が痛むようなことがあったりします。そうやって私たちは外側の問題によって苦しめられることもあります。でも、外側だけではなくて、愛する家族や友人、兄弟姉妹との間にあっても、争いや衝突というものが起こることがあります。また、大きな出来事ではなくても、ささいな出来事によって心が悩まされることも日々経験します。私たちも羊と同じようにいろいろな弱さや難しさや葛藤を抱えているのです。しかし、たとえどんな問題が起ころうとも、私たちは羊飼いである主のうちに安らぎを見出すことができるのです。恐れや不安、失敗や試練、いろいろなことが私たちのうちに日々起こります。でも、その中であってなお、みことばが私たちに教えてくれるのは、どんな時も変わらずに養ってくださる羊飼いのうちに、私たちは休息を手にすることができるということです。だとすれば、私たちはどんな時もこの主に信頼して歩もうとしているでしょうか？この羊飼いのうちに平安を見出して歩もうとしているでしょうか？それとも主以外の何かに真っ先に安らぎを見出そうとしているでしょうか？私たちににとって大切なことは、主こそが私たちの羊飼いであり、この方だけが私たちににとって十分に最高の安らぎを与えることができるお方だということです。羊飼いである主は、羊を緑の牧場に伏させて、いこいの水のほとりに伴ってくださる。神様はそんなすばらしいお方でした。それが、ダビデが信頼した神様の姿でした。

### ▶「たましいを生き返らせる」 3 a 節

ダビデは続けて3節で、「主は私のたましいを生き返らせ」てくださると言っていました。ここで出てきている「たましいを生き返らせ」というのは一体どういうことでしょうか？簡潔に言うのであれば、これは主が落ち込んだ私たちの心を回復させてくださるということです。私たちの心も、さまざまな問題や試練が降りかかってくれば、思い悩んでしまうことがあります。日々の生活の中であって、罪との戦いに敗れて悲しみに暮れてしまうこともあります。目の前で起こっていることが理解できなくて、しかもいつまでたってもその状況に変化が見られなければ、私たちの心は次第に弱り切って希望を見出すことが辛くなってしまうこともあります。この詩篇の著者であるダビデは、それがどんなことなのかをよくわかっていました。彼は神様に見捨てられたかのように感じて、失意のどん底に陥ったこともありました。以前見た詩篇22篇で、そんな彼の叫びの一つを見ることができました。22：1で彼は「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。」と叫んでいました。信仰者として忠実に歩んでいたとしても、苦難に直面して意気消沈することがあるのです。ダビデもそうでした。でも、たとえそのような状況に置かれることがあったとしても、ダビデは確信を持って「主は私のたましいを生き返らせ」てくださると言うことができました。主は落ち込んだたましいをも慰めてくださるお方なのだと、彼は確信して信頼していたのです。

思い返してみれば、まさに羊飼いであるイエス様も、ペテロに対して同じようなことをしていました。ペテロはイエス様に対して「あなたを知らないなんて、決して言いません」と宣言していたにもかかわらず、三度にわたってイエス様を知らないと否定し、挙げ句、そんな人は知らないと言いついて誓ったのです。その後、ペテロは自分がしたことを、そして主が言われたことを思い出して激しく泣きました。彼は大きな過ちを犯したのです。しかし、何度も何度も失敗を繰り返したペテロをイエス様は見捨てることはありませんでした。心碎かれた彼のことを変わらずに慰めて励まされたのです。キリストはそうにして変わらぬ愛を、変わらぬあわれみを示してくださるお方でした。

私たちが確信できることは、この主は私たち以上に私たちがいかに弱くて愚かな存在であるかを知っていてくださるということです。私たちの苦しみや悲しみを理解して下さり、そして慰めを、必要な安らぎを与えてくださるお方だと言うのです。落ち込んだ心を力づけ回復させてくださるお方、それが休息を与えてくださる主でした。

### ▶「義の道に導かれる」 3 b 節

最後にもう一つ、主は羊を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴い、たましいを回復させるだけでなく、3節の最後に「御名のために、私を義の道に導かれます。」と書いていました。これまでも見てきたように、羊は賢い動物ではありませんでした。彼らは先のことを考えて行動することが苦手でした。だからこそ、羊飼いによって正しく導かれることがなければ、彼らは同じ場所にとどまって、その場所が荒れすたれるまで草を食べ尽くすのです。彼らは自分たちが食事をするための土地を自分たちの手で荒廃させてしまう、そんな愚かな性質を持っているのです。もちろん羊飼いは、そのような羊の習性をよく知っています。だからこそ良い羊飼いは群れを1カ所にとどめておくのではなく、いつも彼らを連れて別の場所へと移動して行くのです。そのようにして、土地が荒れすたれることを防ごうとするのです。そうやって羊飼いは群れを連れて行く責任を持っていました。羊飼いがそのようにして群れを導いていくためには、当然しっかりとした行動計画を持っていなければいけないのです。どこに行けば緑の牧草地があるのかだけでなく、どの道を通って行けば、羊たちが安全にそこにたどり着くことができるのか、羊飼いはそのことをよく知っている必要があるのです。羊はどこに何があるのかわかっていません。羊は目的地にたどり着くために、どの道を通ればいいのかもわかりません。でも、すぐれた羊飼いはそれを知っているのです。ダビデは羊飼いのそんな姿をよく理解していました。そして、主の姿を覚える時に、私の羊飼いは、私をいつも正しい道へと導いてくださるお方なのだと確信していたのです。

そして皆さん、感謝なことに、今を生きる私たちも同じ主に信頼して歩むことができます。考えてみてください。すべてのことを支配されている主が私たちに正しい道へと導いてくださるのです。私たち以上に私たちのことを知っていてくださる主が、羊のことを何よりも考えてくださっているあわれみ深い羊飼いが、その羊にとって必要な場所へと連れて行ってくださるのです。確かに、時に私たちの目にはそうは思えないことがあったりします。今私たちが見ているこのみことばと矛盾しているように感じているような出来事に直面することもあります。そして、自分が理解できないことや先が見えないことが起こったりすれば、私たちは恐れや不安を抱くことがあるのです。状況によって、心が揺り動かされてしまう、そんな弱さを私たちはみな少なからず持っています。でもそんな時にこそ、私たちに導いてくださっている羊飼いがどのようなお方かを、私たちは覚える必要があります。もっと言えば、私たちに導いてくださっている羊飼いが、どれほどあわれみ深いお方なのか、羊飼いであるキリストがどんな愛を私たちに示されたのか、そのことを覚えることです。先の状況はだれにもわかりません。

でも、私たちにをはっきりとわかるものがあります。私たちにもうすでに示されているものがあります。それこそがキリストの十字架を通して示された神様の愛です。良い牧者であるイエス様は、もうすでに羊のために命を捨ててくださいました。本来であれば、神様を拒んで羊のようにさまよっていた私たちが受けるべきその罪の罰をこの方は代わりに受けてくださいました。ペテロもこのように言っています。I ペテロ2：24-25に「:24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。:25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。」と。私たちが何かをしたからではありません。私たちはさまよっていましたが、でも、この方がみずから進んで十字架にかかり、なだめの供え物としてその血を流し、そして神の怒りをなだめてくださったからこそ、この方を信じ、受け入れた私たちに救いが与えられました。これが私たちに示された神様の愛でした。この愛は何があろうと変わることはありません。どんな状況に置かれようとも、羊に対する羊飼いの愛やあわれみは変わることはありません。そんなお方が私たちがどんな時も正しい道へと導いてくださるのです。私たちがどんなお方に導かれているのかを覚える時に、どんなにあわれみに富んだ、愛に深いお方が私たちを支えてくださっているのかを覚える時に、私たちはそんなすばらしい主のうちに平安を持つことができなんでしょうか？こんなすばらしい神

様がともにいてくださるといふ真理は、私たちの心に大きな喜びをもたらさないでしょうか？私たちはこんな偉大な主に信頼して、どんな状況にあらうとも歩むことができるのです。

#### ▷「御名のために」

でも、もしそれでもなおまだ心が揺らいでしまうのだとすれば、このことばをよく覚えてください。3節の最後に「御名のために、私を義の道に導かれます。」と記されていました。この「御名のために」ということばは、これまで見てきたすべてのことを、主はご自身の栄光のためになされるということです。主が羊を緑の牧場に伏させることも、いこいの水のほとりに伴われることも、たましいを生き返らせるのも、義の道に導かれるのも、それらすべては神様の偉大な御名がほめたたえられるために、主がなされるのです。そして主の御名があらゆる場所で賛美されるために、主は私たちのような弱い羊をも用いてくださるのです。どのようにか——。主は弱く愚かな私たちの必要を満たしてくださり、道をそれないように守り導き、満足を与えてくださるのです。そうすれば、それを見た周りの人たちは思うのです。一体どうしてこの人はこんなにも平安を持って歩むことができるのだろう、なぜこんなにもひどい苦しみを味わっているのに喜んでいられるのだろうと。なぜ全く先が見えない中であって、ゆるがぬ希望を持って生きて行くことができるのだろうと。そんなすばらしいあかしを立てることができるのです。そして、もしその人たちが自分たちに聞いてくれば、私たちは大胆にこう言うことができます。これは私の力ではありません。私はあなたと同じ無力な存在です。私がゆるがされないのは、私の知恵でも、私に力があるからでもありません。ただ、どんな時も私とともにその羊飼いがいてくださるからですと。私を愛してくださり、私にいつも休息を与えてくださり、満足を与えてくださる方がいるからこそ、私は乏しいことはありませんと。主に信頼しているから、私はどんな時もゆるがされることはありませんと。

私たちがこのようなあかしを立てれば、非常に力強いものになると思いませんか？だとすれば、困難や苦しみの中に置かれる時にどのようなふるまいをするか、私たちには非常に大きな責任があります。この世は口にすることもできません。今置かれている環境は気に食わない、この状況の中でどうやって喜べと言うのだと。今すぐにでもここから抜け出したい、状況がもっと良くなりさえすれば、いろいろなことができる、問題は解決すると。果たして私たちはそれに対してどう応答すべきなのでしょう？私たちが覚えなければいけないのは、羊飼いである主がその状況へと私たちを導いたのであれば、そこに私たちが学ぶことがあるということです。この方は間違った道に偶然誤って私たちを連れていくことがないお方だからです。そしてたとえ私たちには理解できなかつたとしても、神様はその状況を用いてご自身の栄光を現すためにすべてのことを成し遂げられるのです。もちろん、苦しみや試練から助け出されることを願うこと自体が間違っているわけではありません。でも、もし私たちの心がその状況から抜け出すことだけにとらわれているのだとすれば、その状況の中で、いつまでも不安を抱き続けているのだとすれば、私たちはその中で主の栄光を現すという、最も大切な務めを忘れてしまっているのです。

主は「御名のために、私を義の道に導かれます」、だからこそ、どんな時も羊飼いである主の姿を覚え続けることです。この方はすべてのことをご自身の栄光のためになされるのだ、決して間違いは犯されることはない。私たちはそんなすばらしい羊飼いにあって、休息を見出すことができるのです。これが私たちの信頼できる神様です。

### 3. 主は“守り”を与えてくださるお方 4節

三つ目に信頼すべき主の姿として挙げられていることは、主は守りを与えてくださるお方だということです。4節に「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」と続いていました。さて、いま一度羊飼いと羊の姿を思い浮かべてください。これまでに見てきたように、弱く臆病な羊は羊飼いに導かれながら、えさがある緑から緑へと、また、水場を転々と移動して行きました。そして彼らはその道中にあ

って、深い渓谷や山の谷間を通り抜けて行くことができました。羊とともに羊飼いは曲がりくねる谷をめぐりながら、次の緑の牧場へと向かって行くのです。当然、そこにはさまざまな危険が存在していました。容易に想像できることかもしれません。時に深い谷間では、太陽の光が差し込みにくく、暗闇が覆ってしまうことがありました。また、羊の捕食者たちも群れが渓谷を通ることをよくわかっていました。だからこそ、あちらこちらに隠れていて、彼らを襲うタイミングをうかがっていたのです。そこには死の危険というものがいつも隣り合わせでした。

そしてこれは羊に例えられる私たちにも同じことが言えます。私たちの歩みにおいても、試練に直面することがあります。羊飼いである主が私たちにとって必要なものを備えてくださるからといって、私たちがいっさいの痛みや痛みに遭わないということはないのです。むしろ私たちが主の道に忠実に歩もうとすれば、聖さを追い求め続けていこうとすれば、そこには必ず試練があるとみことばは教えていました。イエス様も弟子たちに向かって、ヨハネ16：33で「あなたがたは、世にあっては患難があります。」とはっきり告げていました。主にあって熱心に生きようとする者は、例外なく苦しみに直面することがあるのです。でも感謝なことは、私たちはどんな時もひとりではないということです。ダビデはそのことをよくわかっていました。ダビデはいつも自分とともにおられる方がだれなのかをよくわかっていました。だから「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。」と確信していることができたのです。彼は緑の牧場やいこいの水のほとりに伴ってくださる、導いてくださる主が、同じように死の陰の谷を歩く時もともにいてくださって、守ってくださると信じていました。そしてその変わらない羊飼いの姿に彼は勇気を、力を、希望を見出していたのです。主がともにいてくださるといふことほど、私たちにとってすばらしい知らせはありません。

もう何度も触れていることですが、大切なことなので、あえてもう一度言います。ダビデはここで非常に大切なことを教えてくれていました。それは、私たちの持つ平安や慰め、希望というものは、私たちが置かれている状況を理解したから与えられるものではないということです。これから先に起こること、その答えを手にしたからでもありません。私たちはたとえ今起こっていることが理解できなかったとしても、この先に何が起こるのかがわからなかったとしても、平安を持つことができます。なぜかという、それは偉大な力を持った主権者がすべてのことをご存じであり、すべてのことをご自身の栄光のために成し遂げられる神様が、私たちとともにいてくださると信じているからです。

スポルジョンも、自身の著書でこのように記していました。「『あなたが私とともにおられますから。』これこそクリスチャンの喜びそのものです。航海中に暴風雨に会っても、赤ん坊は、同乗している大人の乗客のように驚いたりはしないものです。母親の胸に抱かれてすやすやと眠っています。赤ん坊は母親がともにいるだけで十分なのです。信仰者も、キリストがともにおられることを知っているだけで十分なはずです。『あなたは私とともにいてくださいます。あなたを持つことは、私の望むものすべてを持つことなのです。私は全き慰めと絶対的な安心を得ています。あなたが私とともにおられますから。』と。確かに信仰者として忠実に歩もうとすれば、良い時も悪い時もあります。神様があふれんばかりの祝福を与えてくださるような、そんなよい時には私たちは神様の姿を覚えて感謝を捧げることが比較的容易にできるかもしれません。でも状況が悪い時はどうでしょう？それぞれの歩みには葛藤や痛みが存在します。積み上げてきたものが崩れ落ちて心に絶望を覚えるような経験をされた方もいるでしょう。では、そんな状況に置かれる時に、あなたは一体だれに信頼を置いて歩むでしょうか？死の陰の谷を歩く時に一体何に助けや慰めや力を見出そうとするでしょうか？人の知恵でしょうか？物でしょうか？覚えるべきことは、どんな困難な状況に置かれることがあろうとも、決して変わることはないお方がいるということです。そしてそれこそが羊飼いである主です。この方はどんな敵からもそのむちや杖をもって羊を守ってくださるお方です。もし、この方がともにいなければ、どんな困難も私たちは乗り越えることはできません。しかし、この方がともにおられるのであれば、越えられない困難はあり

ません。主に不可能なことはないからです。主の手に負えない問題などというものは、この世に存在しないからです。主が羊飼いと私とともにおられる、この真理こそ私たちの慰めです。守りを与えてくださる主、これが、私たちが信頼することができる神様なのです。

#### 4. 主は“祝福”を与えてくださるお方 5節

そして、最後四つ目に信頼すべき主の姿として挙げられるのは、主は祝福を与えてくださるお方だということです。5節に「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」と続いていました。羊飼いと羊の関係ではなくて、食事を用意する主人とそれに招かれる客人の例えをダビデはここに描いていました。ダビデは主人である主に招かれて食卓にあって、その交わりを楽しんでいたのです。ここに「私の頭に油をそそいでくださいます。」という表現があります。当時、食事に招かれたゲストにホストが油を注ぐ習慣がありました。そういう行為をもって、招いた客を歓迎して喜びを表していたのです。また、ここに記されていたとおり、ダビデの杯はあふれていました。言いかえれば、主はダビデのことを招かれただけでなく、彼にあふれんばかりの祝福を注がれていたということです。こうしてダビデは主の祝福を味わって、喜びでいっぱいになっていました。すばらしい光景がここには記されていたのです。

でももう少しだけその食卓がもたれている場面に注意して5節を見てください。5節の初めに「私の敵の前で」と記されていました。驚くべきことは、彼らは敵が周りにいる中で食卓を楽しんでいたのです。ダビデには彼の命をねらう敵たちが迫っていました。人間的に考えれば、大きな危険がすぐそばにある。次の瞬間、何が起こるかわからないような状況に置かれれば、落ち着いてなどいられないでしょう？しかし、そんな中であっても、ダビデは平安のうちに喜ぶことができました。それは主がともにいたからでした。これが、彼が信頼していた神様だったのです。私たちが覚えるべきことは、この同じ神様が今私たちとともに歩んでくださっているということです。

先ほども見たように、信仰者の歩みにおいて困難や苦しみというものは存在します。次の瞬間、私たちに何が起こるのかわからない。そんな状況もあれば、試練に直面して大きな問題がまさにすぐそこまで迫っているような状況に置かれることもあります。しかし、そんな中であらうとも、私たちは安心して主のうちに喜びを見出して歩むことができます。主のあふれんばかりの恵みと祝福を味わって、その交わりを楽しむことができます。祝福を与えてくださる主、これが私たちの信頼できる神様でした。

#### ○まとめ 6節

そして、ダビデは最後にこの詩篇をまとめて、6節で「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、【主】の家に住まいましょう。」と述べていました。これがダビデの持っていたゆるがぬ確信でした。これまでも学んできたように、ダビデは人生にはさまざまな季節があることをよく理解していました。良い時があれば、悪い時もあること、楽しみに満ちあふれているような時があれば、死の陰の谷を歩むようなこと、ダビデはどちらもよくわかっていました。しかし、たとえどんな状況に置かれようとも、たとえどんな厳しい試練や苦難が襲ってこようとも、そこにはいつも主の慈しみと恵みとが終わりなく存在するという。そして何よりも自分のことを支えてくれる、自分のことを守ってくれる、自分に満足を与えてくれるすばらしい主と、この地上だけでなく、いつまでもともにいることができるということをダビデは覚えていたのです。

そしてこれは私たちにとっても期待することができ、楽しみにすることができる約束です。思い返せば、イエス様もヨハネ14：2-3に「:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」と、こんな約束をされていました。そしてこの約束どおりに、イエ

ス様が私たちのために場所を備え、地上に再び戻って来られる日は必ずやって来ます。主が迎えてくださるその場で、いつまでも主とともに永遠を過ごし、主をほめたたえる時が必ずやって来ます。そんな約束を私たちが信じているのだとすれば、そこに喜びを見出しているのだとすれば、私たちに問われることは一つです。あなたはこの地上での人生にあって、一体だれに信頼を置いて歩もうとするでしょうか？ 私たちにとって、主こそが満足を与えてくださるお方、主こそが休息を与えてくださるお方、主こそが守りを与えてくださり、主こそが祝福を与えてくださる、私たちにとって十分な羊飼いです。この方が私とともにいてくだされば、私は足りないことはありませんと。ですから、どんな時もこのすばらしい羊飼いである主を覚え、この方に信頼し、この方の栄光を現すものとして続けて歩んで行きましょう。